〈終了〉の意味と自他の形態

――他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析――

須賀一好

一、はじめに

「終わる」と「終える」[1]の表す意味については、単独の用法だけでなく、「本を読み終わる」「本を読み終える」という複合動詞の形についても、かなり明らかにされてきている。しかし、これらがヲ格名詞句を伴う場合に、「終わる」と「終える」という二つの形態があることについては、意味や用法の分析の過程で十分には言及されてきてはいない。その理由は、ヲ格名詞句を伴う「終わる」と「終える」が、用法上ほとんど重なること、そして、これまでの考察が「やめる」や「よす」などの類義語との意味的な比較、あるいは、アスペクトの分析に重点があったためである。

しかし、自動詞形と他動詞形の意味・機能を明らかにしようとする場合、「話を終わる」と「話を終える」のように、ヲ格名詞句を伴うときの用法がほとんど重なるものは、その表す意味が動詞の自他性とどのように関わっているのか、ということを考察するための興味深い例となる。他動詞形で表現される事態が、なぜ自動詞形でも表現されるのか。その原因を分析することで、自動詞形と他動詞形の機能の違いを明らかにするための一考察としたい。

二、他動詞形「終える」の伴うヲ格名詞句の意味的条件

何かが終わるとは、動きの量が終結点まで達することであり、開始点から終結点までの期間あるいは過程がある。したがって、終わるようにすることを表す他動詞形「終える」が伴うヲ格名詞句は、期間あるいは過程を意味するものでなければならない。

しかし、ただ単に期間や過程が示されていればよいというわけではない。(1)は適格性が低いが、(2)のように「忙しい」が「一日」を修飾すると適格になる。[2]

(1)?一日を終える。

(2)　忙しい一日を終える。

次の(3)も適格性が低いとされる例であるが、(4)(5)は適格である。

(3)?勤務時間を終える。

(4)　一生を終える。

(5)　大学生活を終える。

(3)は、ヲ格名詞句を(6)のように変えると適格になる。

(6) 勤務を終える。

これらの例から、他動詞形「終える」の伴うヲ格名詞句の制限をどのように考えるべきだろうか。

(1)(3)は、次のように、対応する自動詞文にすると、文法的に適格になる。

(7) 一日が終わる。

(8) 勤務時間が終わる。

終結性あるいは完結性は、自動詞形「終わる」の伴うガ格名詞句にもなければならない。(7)(8)が文法的に適格なのであるから、「一日」「勤務時間」という名詞には、終結性あるいは完結性があることになる。したがって、(1)(3)の文法的適格性が低いことの理由は、ヲ格名詞句が終結性あるいは完結性を欠いているからであるとは考えにくい。

「終える」は、「勉強を終える」「仕事を終える」など、典型的な用法においては、継続的な行為を意味する名詞句をヲ格にとる。継続的な行為は、行為の開始点から終結点までの過程を持つ。したがって、行為の終結点には、あらかじめ決まっている動きの量を最後までこなすか、動作主が意志的に適当なところで行為をやめるかの、どちらかによって到達する。[3] どちらにせよ、動作主は、事態の終了という客体の状態変化を起こすこと、すなわち、ヲ格名詞句の「勉強」や「仕事」が「終わる」ようにするということに直接に関与し得ているのである。

(3)が(6)になるということは、ヲ格名詞句が期間を意味するものから、動作主の行為を意味するものに変わるということである。つまりは、ヲ格名詞句が動作主の行為を含意する程度の差が、文法的適格性の違いの原因であることがわかる。「勤務」は、継続的な行為であり、行為の開始点から終結点までの期間あるいは過程を必然的に含意する。しかし、「勤務時間」は、区分けされた「時間」の一つであって、「勤務」という語が含まれてはいても、行為の意味は背景に退いている。したがって、「終える」のヲ格名詞句にとっては、継続的な行為性を意味することこそが必要な条件であると考えられる。

(1)が(2)になると文法的適格性が強まるのは、「忙しい」が付くことによって「その時間内でのまとまりができ、完結的になる」からではなく、「忙しい一日」となることで、同じく「一日」でも、単に期間を意味するものから、動作主の行為の継続としての「一日」に意味が変化したからである。

三、自動詞形「終わる」が複合動詞の後項動詞である場合

「本を読み終わる」というように、「終わる」が複合動詞の後項動詞として使用される場合は、ヲ格名詞句ではなく、前項動詞の意味的な条件が問題になる。この問題を扱った張麗華氏の論文は、前項動詞の意味的な条件を次のようにとらえている。[5]

〔1〕動作性（動作・作用を動きととらえる表現）を伴うものであり、状態的な表現ではない。

〔2〕継続的な動きを表す意志動詞の場合は、動きの全体量が限定されている場合と、動作主の意志によって必要な程度まで行うことで終了する場合とがあるが、そうではない動詞の場合は、動きの全体量限定が前提になっている。

同論文は、意味的な条件〔1〕の説明として、「過ごし終わる」「飼い

終わる」「暮らし終わる」「住み終わる」というようには言わないことを取り上げ、その理由は、これらの前項動詞が動きを含んだ動作ではなくて、一種の状態であるからとしている。

しかし、「過ごす」「飼う」「暮らす」「住む」という動詞は、主体が行う個々の具体的な動作の形態を捨象した[6]、「長時間の持続を表す動詞」[7]であり、典型的な状態を表す動詞ではない。では、「時を過ごす」「ウサギを飼う」「東京で暮らす」「田舎に住む」等の行為の終結を「～終わる」で表現できないのは、なぜだろうか。その点について、「持つ」と「見る」を比較してみることにしよう。

「持つ」と「見る」は、客体に状態変化はもたらさないがヲ格名詞句を伴い、ティル形で継続動作を意味するなどの点で意味・文法的に共通する。しかし、「終わる」の下接においては異なる。「見終わる」とは言うが、「持ち終わる」とは、普通は、言わないのである。その理由は、「見る」が動作性を伴うが、「持つ」は動作性を伴わないからであるとは考えにくい。では、何が原因だろうか。

何かの対象を持つという行為は、通常、その対象を保持し、あるいは所有することによって、その対象が保持者あるいは所有者から離れないようにすることである。その行為は、何かを達成するための手段ではない。

一方、「見る」の場合は、たとえそれが一つの物体を対象としたものであっても「見終わる」と言える。それは、「見る」という行為によって何かを認識し得たり、欲求を満足させたりして、初めて行為の目的が達成されるということがあるからである。行為が到達点に達することによって終結するということがあるのである。

「時を過ごす」「ウサギを飼う」「東京で暮らす」「田舎に住む」等の行為の場合も、同様に考えることができる。これらも、行為の存在すること自体が目的であるので、行為の達成点、すなわち終結点が設定されないのである。したがって、複合動詞の前項動詞の場合の意味的条件は、動作性を伴うものとするだけでは不十分である。それが人の行為であるならば、その行為は何かを達成する手段であることが必要である。動きの量は、必ずしもあらかじめ定まっている必要はない。何かを達成した（悪い出来事の場合も含めて）時点が行為の終結点なのである。ただし、人の意志が関与しない動きの場合は、動きの全体量が限定されていることが必要である。

次に意味的条件〔2〕については指摘されている通りであるが、「笑い終わる」という例を「動きの量がなくなることではなく、動作主の意志によって、必要な程度まで行なったと思う動作・作用を終えることである」[8]と説明するのは正しくないだろう。「笑う」という行為は、「泣く」と同様に、それが演技としての行為でない限りは、非意志的行為であり、心理的・生理的な欲求が充足された時に「笑う」という行為は達成され、終了するのである。

以上から、「終わる」が複合動詞の後項動詞である場合の、前項動詞の意味的な条件は、何かを達成するための行為、あるいは、全体量が限定された自然的作用であると言える。

四、自動詞形「終わる」が、他動詞形「終える」と同一のヲ格を伴う場合の意味的条件

他動詞形「終える」が、単独でヲ格を伴う場合のヲ格名詞句は、行為の単なる対象物ではなく、動作主の行為を含意するものでなければならないが、それは、自動詞形「終わる」でも同様である。

(9) 太郎は本を { ×終わった。 ×終えた。

(10) 太郎は宿題を { 終わった。 終えた。

(11) 太郎は読書を { 終わった。 終えた。

(12) 太郎は自己紹介を { 終わった。 終えた。

「本」は、行為を含意していないので、「終わる」「終える」のヲ格にはなれないのである。

これに対して、(10)(11)(12)は、ヲ格を伴っているが自動詞形による表現もできる。これらの文のヲ格名詞句と自動詞形との関係をどのようにとらえればよいのだろうか。

意味的・構文的な自他対応を持つ自動詞形は、ガ格で示された事物の状態変化を意味するが、それだけではなく、動作をも意味する場合がある。このことは、「終わる」だけではなく、たとえば「立つ」「曲がる」「あく」「かわる」などの自動詞形にも認められる。

(13) 太郎は席を立った。

(14) 太郎はタバコ屋の角を曲がった。

(15) 太郎は口をあいた。

(16) 太郎は座席をかわった。

しかし、これらには違いもある。(13)(14)以外は他動詞形を使っても表現できるが、(13)(14)は他動詞形「立てる」「曲げる」を使って表現することができない。また、次に示すように、(13)(14)以外はヲ格をガ格にした自動詞文が成立するが、(13)(14)は成立しない。

(10') 太郎は宿題が終わった。

(11') 太郎は読書が終わった。

(12') 太郎は自己紹介が終わった。

(13') ×太郎は席が立った。

(14') ×太郎はタバコ屋の角が曲がった。

(15') 太郎は口があいた。

(16') 太郎は座席がかわった。

この理由は、(13)や(14)は、動作主自身が全体として「立つ」「曲がる」という状態変化を生ずる動作の主体になっていて、ヲ格はその動作の指向先を示しているのに対して、(10)(11)(12)の「終わる」や、(15)の「あく」の主体は、太郎という動作主そのものではなく、動作主の行為内容であり、動作主の身体部位だからである。そのために、「太郎が終わった」「太郎があいた」では、状態変化の主体が不明確になり、「太郎は宿題が終わった」「太郎は口があいた」のような部分主格のある自動詞文が使われるのである。(16)の場合は、動作主が全体として状態変化を生ずる動作の主体になっているが、同時に、動作主の動作の行われる場所（「座席」）の変化ももたらすので、(16')のように「座席」を部分主格にした自動詞文も成立するのである。

ところで、こうした自動詞文は、次のような典型的な自動詞用法からは、少し外れている。

①〔主体の状態変化〕　（たとえば「太郎の話が終わる」）

②〔主体の動作〕　（たとえば「太郎が歩く」）

③〔主体の状態変化と、それをもたらす動作〕　（たとえば『太

郎が立つ」）

(13)(14)は、③の用法であるが、(10)(11)(12)および(15)(16)は、③の用法の特殊な場合、すなわち、〔主体の動作が発現するところの状態変化と、それをもたらす動作〕なのである。

まず、人が自らの「口」をあける場合を取り上げよう。

(17) それは　まるで　人が　大口を　あいて　あくびをしている　かお　そっくりで（舟崎靖子『あくびおばけ』）

(18) はい、口を大きくあいてください。（歯科医院にて）

「口」は普通、視界に入らない。そのため、変化を与える対象としては、客体化しにくい身体部位であると言えよう。その「口」において、動作主は動作する。「口」を動作の指向対象として動作し、その動きそのものが「口」の状態変化となる。動作主の動きが、動きの発現する部分においては状態変化であるために、その状態変化を表す自動詞形によって動作主の行為を表しているのが、この用法なのである。

そのため、身体部位を状態変化を起こす対象とし、動作主がその変化を与えるための動作をする、他動詞文としての把握も可能になるので、他動詞文と自動詞文との表現領域が重なり、自動詞形による用法があらためて問題にされるのである。

ただし、動作主自身の身体に生じる状態変化であれば、この種の自動詞形による表現がすべて可能かというと、そうではなく、たとえば、「腰を曲がる」「腕を曲がる」とは言えず、他動詞形「曲げる」を使わなければならない。

自動詞形の使用に関するこのような差は、動作主の動作と対象の状態変化とが一体的に結びついていて、動作であると同時に状態変化でもあると言えるものと、動作主の動作は対象の状態変化をもたらすためのものであって、動作主と対象とが、状態変化の与え手と受け手とに分化してとらえられるものとの違いによって生じる。「腰」や「腕」が「曲がる」ように動作する場合は、それらは客体化され、動作主と対象とが、状態変化の与え手と受け手とに分化してとらえられているのである。

なお、同じく「口」における動作でも、〔閉〕の動作は、「口を閉じる」と言うのが普通である。「閉じる」は、「ドアが閉じる」のように、ヲ格を伴わない用法もあり、さらに「閉ざす」という対応する語形があるが、「閉ざす」には別の意味も加わるので、単なる〔閉〕の動作には用いられない。このように、「閉じる」は、ヲ格を伴わない用法があり、形態的にも「閉ざす」という、より他動詞的な対応形を持つ点で、自動詞的である。しかし、動作主の身体部位以外についても、「ドアを閉じる」のような用法があって、通常の自動詞よりも広い用法を持っている。「閉じる」には、こうした問題点もあるので、この点については、別に考察をしたい。

次に、動作主が自分の場所を他者と交代する場合を見ることにしよう。

(19) 席をかわってくれませんか。

この「席をかわる」は、動作主が自分のいる場所を移動することである。動作主の移動を意味する動詞は、「道を歩く」のように、移動行為の指向する対象をヲ格で示せるが、それは当然ながら、動作主の移動行為の行われる場所である。(19)の「席をかわる」も、同様に動作主の移動行為を表し、「席」は動作主の移動行為の行われる場所である。ただし、それは「歩く」のように動きだけを表す動詞

とは異なり、「かわる」という状態変化を表す自動詞によって表現されている。移動行為が動作主の存在する場所の変化と直接結びついているために、動作主は「席がかわる」という状態変化に対して、動作主を変化の与え手、ヲ格名詞「席」を変化の受け手というように分化させてとらえなくても済んでいるのである。

このように、状態変化が動作主の動作の発現するところに生じ、それらが一体化している状況においては、ヲ格名詞句に状態変化が生じるようにする行為を自動詞形によって表現し得ることもあるのであるが、これも典型的な自動詞用法の延長にあると言える。

では次に、〈終了〉の意味を表す場合について考えてみよう。

次の⑳㉑㉒のａの文は、文法的適格性において差が認められるが、それはヲ格名詞句の意味内容の違いによって生じている。[9]

⑳ａ×いやな宿題などは早く終わりたい。
　ｂ　いやな宿題などは早く終えたい。
　ｃ　いやな宿題を終わって、遊びに行った。

㉑ａ?退屈な読書は早く終わりたい。
　ｂ　退屈な読書は早く終えたい。
　ｃ　退屈な読書を終わって、遊びに行った。

㉒ａ　自己紹介は早く終わりたい。
　ｂ　自己紹介は早く終えたい。
　ｃ　自己紹介を終わって、席についた。

⑳の「宿題」は、行為性を含意してはいるが、行為によって処理される対象である。そのため、それを終了するには残されている仕事量をこなさなければならない。動作主の行為の終了は、すでに設定されている行為内容の量によって決まるのである。⑳ｃのように、すでに設定された行為内容をこなしていれば自動詞形を使うことができる。それは、あらかじめ設定された終結点まで行為したということである。終結点まで行為したということが、ヲ格の「宿題」の終了という状態変化と直接に結びついているのである。

ところで、⑳ａは、「終わる」を㉓のように「やり終わる」という複合動詞にすれば許容されるようになる。

㉓　いやな宿題などは早くやり終わりたい。

これは、次のように説明することができる。「やり終わる」という複合動詞は、「やる」という〔実現形態〕[10]において、「終わる」という〔結果内容〕が生じる行為を意味する。つまり、動作主の行為が関与している事態の終了を意味する。したがって、複合動詞の場合は、行為がまだ行われずに、残されている場合であっても、「終わる」という状態変化が動作主の行為に伴って生じるものであることを形態的に明示しているので、行為そのものの終了の場合と同じように、自動詞形の使用が許されるのである。

一方、㉒は、ａのように動作主の行為がまだ行われずに残されている場合でも、自動詞形「終わる」が使える。「自己紹介」とは、自分について説明するという言語行為である。その行為は、話者が自分について述べさえすれば、一応は達成される。そのために、特に行為量が設定されていなくても、「自己紹介」が終了するという状態変化は、動作主が行為をやめることと直接に結びついているのである。このようなヲ格名詞句の場合は、動作主のなすべき行為内容が残されている場合でも、自動詞形「終わる」を使うことができるのである。

㉑の「読書」という行為は、「宿題」のような行為の対象として

の場合と、「自己紹介」のような行為そのものという場合の両方があり、そのどちらで解釈するかによって(21)の許容度は異なると考えられる。(11)

このように、行為がまだ達成されていない場合で、「宿題」のように行為量があらかじめ設定されており、行為によってそれを処理するような対象をヲ格名詞句にするときは、自動詞形「終わる」が使えない（使いにくい）が、「自己紹介」のように、行為量があらかじめ設定されていない対象では、自動詞形「終わる」が使える（使いやすい）。一方、行為の達成が実現した（すなわち、「終わった」と表現される場合）のであれば、ヲ格名詞句が行為によって処理される対象であろうと、行為そのものであろうと、「～を終わった」と言えるのである。

以上のことは、次のように説明できよう。「終わる」が複合動詞の後項の場合は、前項動詞は、何かを達成するための行為、あるいは、全体量が限定された自然的作用であった。「終わる」の単独用法で、ヲ格を伴う場合は、自然的作用ではなく、行為による終了を表すが、これも複合動詞の場合と同様に、何かを達成することで終了するのである。

しかし、「終わる」の単独用法の場合は、達成のための自己の行為を明示する手段を持っていない。複合動詞の場合は、前項動詞がそれにあたるが、単独用法の場合、それはヲ格名詞句に含意されるしかないのである。したがって、ヲ格名詞句の含意する達成するための自己の行為に対して、動作主がどのように関与しているかが、自動詞形「終わる」がヲ格を伴って使用できるか否かを決定する要因なのであって、動作主の意志の強弱が問題になるわけではない。

「自己紹介」のように、行為量があらかじめ設定されていない行為における自己の行為の達成は、適当なところで行為を打ち切っても実現する。いつでも終了可能なので、「終わりたい」という、自動詞形による希望表現が不自然ではないのである。ところが、「宿題」のように、すでに行為量があらかじめ設定されている場合は、自己の行為の達成は、残されている行為量をこなすことでしか実現しない。それは、行為の対象が終わるようにするための行為をすることである。そして、その意味を表す形態が他動詞形「終える」なのである。

また、行為の達成が実現している場合には、ヲ格名詞句が行為によって処理される対象であろうと、行為そのものであろうと、自動詞形「終わる」を使うことができるのは、達成するまで行為をしたことに伴って、必然的に自己の行為の終了という状態変化が実現しているからである。状態変化を起こすための行為をしなくても状態変化が実現するのである。そして、同様に、行為量があらかじめ設定されていない対象の場合においても、その行為の終了は行為をやめることによって必然的に実現するので、終わるようにするための行為をするという意識を持たなくても済んでいるのである。

この点を、より明らかにするために、＜終了＞の局面と＜開始＞および＜継続＞の局面とを比較してみよう。

動作主の行為そのものと言えるものをヲ格にとり、状態変化が実現したことを表現する場合でも、＜開始＞および＜継続＞の局面を意味する場合は、＜終了＞の局面を意味する場合と異なり、自動詞形が使えない。

(24)×太郎は自己紹介を始まった。

㉕×太郎は自己紹介を続いた。

この理由は、＜終了＞の局面では、その行為を達成するまでおこなったことが、同時にヲ格で示された対象（自己の行為内容）の状態変化の実現でもあるのに対して、＜開始＞の局面では、「始まる」ようにするための行為を新たに行わなければならないからである。＜継続＞の局面でも、自己の行為内容が続くようにするために行為をするのである。それは、動作主が、ヲ格で示された事態を発生させるために行為するのであって、＜終了＞の局面を意味する場合のように、終了させるための新たな行為をしなくても終了という状態変化が発生するのとは、異なるのである。したがって、＜開始＞や＜継続＞を意味する場合は、たとえヲ格が動作主の行為内容を意味するものであっても、動作主はヲ格に対する働きかけの与え手として把握され、その動作もヲ格に働きかけを与えるための動作として把握されることになるのである。

五、おわりに

自動詞形「終わる」には、「話を終わる」のような用法があり、他動詞形「終える」と同じ用法を持っているように見えるが、これまでの考察で明らかなように、それは自動詞形本来の意味する領域を越えるものではない。自動詞形による表現は、事態を自身の変化・作用・動作であるととらえているのである。たとえ、対象に状態変化が生じても、それは自身の動作に伴って生じたものとして認識される。他動詞形による表現のように、対象に状態変化や事態発生をもたらす働きかけをしたと認識されているわけではないのである。

注

(1)「終わる」の他動詞形は「終える」だけではなく、地域によっては「終わす」という語形が用いられているが、本稿は「終える」によって考察した。

(2) 例(1)から例(6)までは、杉本武氏「やめる・よす・おえる」（『日本語研究』第8号、一九八六）による。なお、同論文では(1)および(3)を不適格な文と判定している。

(3) 張麗華氏「日本語の『シオワル』と中国語の『完』について」（『語文』第46集、一九八五）による。

(4) 杉本武氏前掲論文36頁

(5) 張麗華氏前掲論文

(6) 小田由美氏「局面動詞『～しはじめる』について」（『横浜国大国語研究』第4号、一九八六）による。

(7) 高橋太郎氏『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』（『国立国語研究所報告82』、一九八五）による。

(8) 張麗華氏前掲論文26頁

(9) 例文は、森田良行氏『基礎日本語Ⅰ』（一九七七）386頁による。森田氏は、「『いやな宿題などは早く終えたい』で、『終わりたい』は用いない。」としている。

(10) 前項動詞を（実現形態）、後項動詞を（結果内容）とすることは、石井正彦氏「現代語複合動詞の語構造分析における一観点」（『日本語学』2巻8号、一九八三）による。

(11) 張麗華氏前掲論文26頁に、「読み終わった図書は必ず返却」という用例が紹介され、これは「動作主の意志によって、必要な程度まで行なったと思う動作・作用を終える」ことの意味であろう、としている。㉑の「読書を終わる」は、このような場合と、読書の時間として設定された場合の、二つの場合が考えられる。

（山形大学　教育学部助教授）